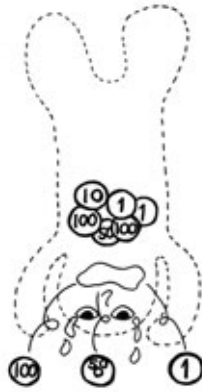


みんなの童話

なぜの生き物



小学四年のさやかは、ななと近くのプールまで泳ぎに行った。すべり台やジャグジーで遊んだあとアイスを買った。

「ねえ、さやか。たこやきも食べたいな。アイスのお金しか持つてこなかったの。お願い。二百十円ちょうだい」

ななが、さやかにねだった。

「うん、いいよ」

さやかか財布からお金を出した。

そんな様子をこっそり見ている透明な生き物がいる。

「フッフッフ。二人ともお金をあげたり、もらったりしてお金はモノと同じだと思ってるな。さあて、どっちにしようか。さやかの方がたくさん持ってるよ」

「よし、ターゲットはさやかだ」
さやかか家の中に入ると、続いて透明な生き物も入った。

透明な生き物は、人間の子どもが泣いていると、なぜか、つられて泣いてしまう。だから、子どもを悲しませたくなかった。

「さやかは、お金を大事にしているから、食べても泣かないだろうな」

ゲームに夢中のさやかを横目に、机の上の財布に手をつっこんだ。

パクパク、パクパク。

「お金は実にうまいなあ。もっと食べるぞ」

貯金箱にも手を伸ばした。透明な生き物は誰にも見えないが、お腹に入ったお金はよく見えた。けれど、さやかは気付かなかった。

ある日、さやかは、ななと遊ぶ約束をした。その時になって、財布のお金がないことがわかった。「あれっ、変だな。とりあえず貯金箱から出して持って行こう」と。あれれ！空っぽ。兄ちゃんか

とったのかな。それともママ？まさかね。泥棒かな」

ママは出かけたまま、まだ帰っていないかった。

さやかは、悲しい気持ちのままリュックを背負うと、ななの待つ公園まで走った。

「ジー、ジー、ジー、ジー…」

セミがひたすら鳴いている。

「大変だよ。どうしてかわからないんだけど、私のお金が全部なくなっちゃったよ。だからお願い、貸してくれる？」

呼吸を整えながら、ななに遠慮がちに言った。

「ええっ。大丈夫なの」

ななの目が、まんまるくなった。

「ママが、まだ帰ってないからどうしたらいいのかな。それで、貸してほしいんだけど…」

「ごめんね。貸してあげられないの」

ななが、すまなさそうに言った。「どうして、だめなの？」

「お母さんがね、お金は働いた人が手に入る物だから、特別な理由がなかったら、働かない人にはあげてもいけないし、貸してもいけないって言ったの。だから、この前もらった二百十円はかえすからね。ごめんね」

家に帰ったさやかは、もう一度財布と貯金箱の中を見た。

「お金がないと何も買えない。簡単にお金は手にはいらぬし…」

ママ、早く帰ってきて」

さやかの目から、なみだが出た。

透明な生き物は、静かな場所が好きだった。今日もお気に入りの荒地でゴロリと横になった。そして、目をつぶって集中した。すると、さやかの家の中が見えた。「まさか、泣くなんて思いもしなかった」

透明な生き物は、泣きながら逆立ちをした。すると、開けた口からお金がこぼれ出た。

チャリン、チャリン。

泣いていたさやかは、お金の音を聞いた。突然、貯金箱がたおれた。そして、財布の口が開いたかと思うと、なかったお金が増え始めた。

それからのさやかは、お金をあげたり、貸したりしなくなった。透明な生き物は、お金を探しながらこれからも生きていく。

しろやま会員 石川洋子